

洋子の播州歌舞伎 ― 伝統の若き継承者 ―

「ねえ、ちょっと洋子！」

追いかけてきた美咲の声にはっとして、洋子はゆっくり振り向いた。

「もうすぐ定期演奏会よ。」

美咲が自転車置き場の通路で仁王立ちしていた。

「ごめん！ それはわかってる。でも、今日のところは……。」

「ほんま……、しゃあないな。全体練習にはおってほしいんやけどな。そっちもたいへんやろうけど……。」

吹奏楽部の部長の美咲にも、洋子の立場はよくわかっている。それだけに洋子は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

二足のわらじを履くと、こういう時に自分を追い詰めることになるかわかっていたつもりだったが、この状況は、やはり辛い。吹奏楽部員の一人である自分、播州歌舞伎クラブの一人である自分。分身したい気分だった。

「ほんま、ごめん。」

洋子は手を合わせ美咲に頭を下げ、自転車で飛び乗った。

公民館への道のり、洋子は複雑な思いだった。

「美咲、怒ったな。みんなに悪いなあ。やっぱり、二つのことを一緒にやるんは、無理なんやろか？」

洋子は、もやもやした思いを断ち切ろうと、自転車のペダルを強く踏み込んだ。

公民館に着いた洋子は、けいこ場へ急いだ。「ふるさとフェスティバル」の公演に向けての播州歌舞伎「寿式三番叟」のけいこは熱を帯びていた。

「すみません、遅れました！」

そう言って洋子は更衣室で運動着に着替え、けいこの輪に入った。

練習には、高校生や会社帰りの社会人などクラブの仲間が集まっている。今日も遠くから駆けつけた大学生の由香里もいた。洋子は由香里と目があった。由香里がにっこり笑った。洋子はさっきのもやもやが吹き飛んでいくのを感じた。由香里は洋子の慕っている大好きな先輩なのである。

洋子が播州歌舞伎のクラブに入ったのは小学校四年生の時、「ふるさとフェスティバル」での公演を見たのがきっかけだった。地元の歌舞伎に感動した洋子は、同級生の綾子と一緒にクラブに入会した。その時、クラブには中学三年生だった由香里がいた。ちょうど今の洋子と同じ年だった。

綾子は中学校に進学しバスケットボール部に入った。両立は難しいと考え、すっぱり播州歌舞伎クラブをやめた。別に歌舞伎が嫌になった訳ではなかったが、彼女なりに考えた末の決断だった。

洋子は吹奏楽部に入った。播州歌舞伎クラブの練習は週一回金曜日だけだから、なんとか両立できるだろうと考えていた。それに由香里先輩と別れるのがさみしくもあり、どうしても歌舞伎クラブをやめる気にはなれなかったのである。

中学一年と二年の時も、定期演奏会とフェスティバルの公演の時期が重なった。しかし吹奏楽部には先輩たちがいたし、洋子の立場も気楽だった。みんなも歌舞伎の練習を優先させてくれた。だが今年も三年生。部活での自分の役割から考えると、全体練習にいないというのはまずかった。

「中の太夫！ 何やっとなねん！ 手首の動きが甘い！ 手の高さを合わさんかいな！ ほら、気持ち入れて、気持ち！」

中の太夫とは洋子のことである。師匠の和歌若先生からしったの声が飛んだ。

洋子は我に返って、役を演じきるけいこに励んだ。

けいこが終わったのは午後九時を少し回ったところだった。

「お疲れさんやね。洋子ちゃん、上手になったやん。」

由香里が洋子に声を掛けてきた。先輩に褒められた洋子はうれしかった。

「いえ、全然です。でも先輩、大学へ入って住まいが遠くなってしまったのに、毎週毎週、大変でしょ。とくに公演前は毎日やし。」

洋子は由香里の気を引こうとして、そんなことを言った。

「彼氏がいない、そう言いたいんちゃう？」

由香里は笑って応じた。

「いえ……、そんなつもりじゃ……。」

洋子は由香里切り返しにろうばいして顔をあかくした。

「じよだんや。わかってるって。私も大学に入って寮で一人暮らしするようになって、いつときやめようかと思っただんや。でもな、部員も十名ほどしかおらんやろ。それに、なにかやめきれんぞな。それで、続けることにしたのよ。」

洋子は黙って聞いていた。

「でもやめきれんかったわけがわかってきたのは最近やね。なんて言うのかな、元禄時代から伝えられている播州歌舞伎の重さというか、すばらしさというか、演じる楽しさというか、そんなもんを感じるようになったんよ。あつ、ここでやめたらあかん！ って感じたんよね。」

洋子は初めて播州歌舞伎を見た時の感動が、今はすっかり薄れて消えてしまっていることに気づいた。そして、自分はどうしてこのクラブをやめずに続けているのだろうかと自問した。「惰性で続けているだけなのだろうか……」答えは見つからなかった。

「先輩は中学三年生のころ、どんなことを考えながら歌舞伎をやっていたんですか？」

洋子は由香里に聞いた。

「どうやったろうな……。今日はこれができた、明日はあれができるようになりたいっていう気持ちでやってたかな。でも、歌舞伎のけいこはいつも楽しかったわ。」

由香里は更衣室へ行こうと立ち上がった。洋子も一緒に立ち上がりながら、

「先輩がさっき言った、播州歌舞伎のすばらしさって何ですか？」

と、由香里に尋ねてみた。

「それは難しい質問だな。」

由香里は立ったまま笑って、ひと呼吸おいた。

「そうやね、それは自分が播州歌舞伎を演じる楽しさと、伝統芸能をつないでいるっていう心地よさというか、責任感というか……。まあ、自己満足なんやろうけど、そんなところやね。」

「伝統をつなぐ……。」

洋子は由香里が言った言葉を繰り返した。

そういうことを考えたことがなかった自分に気づき、更衣室に入っていく由香里の背中を見つめた。

次の日の朝、吹奏楽部の朝練習に参加するため、洋子はいつもよりずっと早く学校に行った。自転車置き場に、まさにヘルメットを取ろうとしている綾子がいた。洋子が声を掛けた。

「おはよ。引退したのに早いやん。」

「あら洋子、あんたも早いやんか。あつ、そうか、定演も近いしね。」

綾子は大きなバッグを肩にかけながら言った。綾子は単語を省略する特技がある。

「シユウタイでいいとこまでいってんねん。二年生が、どうしても練習出てきてくれて言うし。このチクタイはどうしても優勝したいんやって。でも、あんたはえらいな、歌舞伎も三年間続けたし。尊敬するわ。ふるフェスも近いんやろ？」

二人は歩きながら話した。

「ねえ、綾子、歌舞伎やめて、よかった？」

「えっ？」

「今な、部活と歌舞伎の両方やってんのがよかったんかどうか、わからんようになって……。」

「洋子、あかんよ、今になってそんなふうを考えるの。うちはもうバスケやるって決めた時、両立は無理やと思ったからやめたんやから。それに洋子は歌舞伎が大好きやんか。あんたがけいこしてる時の顔は生き生きしてるし、これは洋子にかなわんと、いつも思ってたわ。」

「生き生きしている……」洋子は、綾子の目に自分がそんなふうに映っていたことが意外だった。

「定演もふるフェスもがんばりや！」

そう言って、綾子は体育館へ向かって走っていった。

綾子と話した日から、洋子はけいこに取り組む自分が、今までとは違う自分であるように感じ始めていた。

由香里の言葉と綾子の言葉が、浮かんでは消え、消えては浮かんできた。しかしいつの間にか、それも忘れ、無心に演じていた。その時、

「おっ、だいぶええな、そこええぞ！」

と、和歌若師匠の声が掛かった。

師匠の声で我に返った洋子は、夢中になってけいこに打ち込んでいた自分に驚いた。

「ふるさとフェスティバル」のフィナーレを飾った公民館播州歌舞伎クラブの「寿式三番叟」は、部員たちの堂々とした演技で幕を閉じた。

たくさんの観客からの拍手が鳴りやまなかった。美咲も綾子も客席から拍手を送っていた。幕が下りた舞台で洋子は部員たちと成功を喜んだ。由香里と抱き合った。

「私、今、由香里さんが『伝統をつなぐ』と言った意味が本当にわかった。」

